

国際語としてのエスペ란ートの可能性（1）

安藤 裕介

The Possibility of Esperanto as the International Language

Yusuke ANDO

0. 序

コミュニケーションの手段の急速な発達により、母語が違う世界中の人々が、何らかの媒介言語により、自己の意志伝達を行う機会が著しく増大して来た。その際、その媒介言語が大国の言語、最近では、国際的な場面においては、英語がその役割を果たすことが多いと思われる。確かに、英語が、これほど普及している現代において、英語にその役割を担わせる事は、何と云っても、極めて便利であるし、好都合であると言えよう。

しかし、普及しているとは言っても、英語はあくまでも、アメリカ合衆国、イギリス等の地域語に過ぎないのである。要するに、数え方によって、色々と違いがあるので、正確なことは言い難いが、約5000～10000の地域語の1つに過ぎないのである。ゆえに、英語を母語として生まれた子供は、もし、英語が国際語であるとすれば、自分の母語と国際語が同一ということになり、自分の母語以外に、新たに、英語を学習しなければいけない我々、日本人等と比べて、自分の母語以外に、特に、別の言語を学習する必要はないのだから、色々な意味において、優位な立場に立つのは否定できない。要するに、便宜性という理由だけで、英語を、（もちろん、他の地域語の場合でも、同様である）国際語として採用していいのだろうかという問題が、大きく、我々

の前に立ちはだかるのである。

筆者は、その問いに対して、否定的な見解をもっている。国際語としては、特定の地域語を採用するのではなく、地球上の誰に対しても、中立、公平な言語（したがって、人工語にならざるをえないが）が望ましいと考えている。

では、国際語としてふさわしい中立、公平な言語は存在するのだろうか。筆者は、そのような言語は、現在のところ、ザメンホフ博士が作り上げたエスペラント以外、存在していないという認識をもっている。後でも少し触れるが、確かに、エスペラント以外にも、多くの国際語案は出されて来た。しかし、その中で、生き残っているものは、唯一、エスペラントだけである。これは、他の人工国際語には存在しなかった、国際語にふさわしい多くの優れた点を、エスペラントそれ自体の中に内在化しているからであろう。

したがって、本研究では、そのエスペラントが、国際語として、どのような点ですぐれているかということについて、筆者の興味に合わせて、対照言語学の観点からの議論を展開する。しかし、紙面の関係その他の理由から、この稿においては、エスペラントの言語学的概略を述べるにとどめる。この稿の発展的議論については、別稿に委ねる。

1. エスペラントの言語学的概略

旧約聖書の「バベルの塔」の伝説¹⁾以来、「人類がお互いに理解しあうための言葉」として、昔から様々な計画が立てられて来た。世界語として考案された言語は古代から今日までで約600にもものぼると言われる。

上述したように、世界語の思想は、古代にはすでに広く存在したが、中世にはたいした発展もなかった。中世の教会を中心とした社会体制の中で、教会で使われていたラテン語が国際語の機能を部分的に代行していたため、世界語、国際語の思想はあまり発展しなかったのである。

しかし、中世の間、ずっと勢力を保っていたラテン語が没落しつつあった17世紀、世界語の問題がより注目されるようになった。合理主義の祖、デカルトや、もうひとりの合理主義哲学者、ライプニッツは、世界語創造の先駆的存在であったが、彼らの「哲学的」先験語は、結局のところ、実体をもた

ない観念の産物に過ぎなかった。

1878年に発表されたヴォラピュクは注目に値する。それは、この言語が、人工国際語として実際に普及した最初のものだからである。その文法はかなり規則的であるが、同時に複雑である。語彙は、その大部分を自然語、特に、ドイツ語と英語から多く取っている。確かに、一時的にしろ、この言語は普及していったが、その難解さと自然に進化する力の欠如のために、崩壊して行ったのである。

1887年、本研究で取り扱って行くエスペラントが発表されたのである。エスペラントは、それまでに発表された様々な国際語案の問題点を克服する形で誕生したのである。様々な理由により、その初期においては、それほど高い評価は得られなかったが、エスペラントが内在的に有する、国際語としての妥当性のゆえに、徐々に普及して行き、現在に至っているのである²⁾。

エスペラントの国際語としての妥当性を論じる前に、概念上、注意すべきことがある。それは、世界語と国際語は区別されるべきだということである。もちろん、歴史的には、この2つの概念は始めから区別されていたのではないが、次のように区別することが、妥当だと思われる。「世界語」は各国の民族語を廃止して、世界中の人々が完全に一つの言語を使うことを目的とした言語である。要するに、それのみを人類の唯一の言語にしようという単一世界語を目指しているのである。一方、「国際語」は同じ言語を使うものの間ではその言語を使い、異なった民族語の者が話し合う場合にのみ、一つの共通語を使おう、という考えから作られた言語である。エスペラントはこの「国際語」をめざしているのである。ちょうど、日本人において、共通の方言を所有しているものどうしでは、コミュニケーションの際に、その方言を使うが、異なる方言を所有しているものどうしでは、共通語である標準日本語を使用するのに状況は似ている。エスペラントは、この標準日本語のような役割を、世界レベルで達成することをめざしているのである。

次に、国際語の基本的三条件について言及する。筆者は、以下の三条件を満たしている言語が、国際語として妥当であると考えている。また、後で、細かく吟味するが、エスペラントはこの三条件を満たしていると考えている。

(I) 学習が容易であること

例外や不規則変化がなく、造語力に富むことが必要である。

(II) 中立公平であること

特定の国の言語を国際語として採用すれば、他の国民の犠牲の上に、特定の国民に利益を与えることになる。

(III) 表現力が豊かであること

単に、情報を伝えるだけでなく、国際語を使って小説や詩が書けたり、感情表現ができなければならない。

(I) は、妥当な国際語が所有しなければいけない至極当然の条件と言えよう。エスペラント以外の他の国際語案は、まずこの条件を満たしていなかったがために、崩壊していったと言えよう。

ただし、(I) については少し補足が必要である。国際共通語（国際補助語）エスペラントは異言語間、異文化間のコミュニケーションの道具として作られた言語であり、母語や居住地の日常生活言語とは違って使用者が自分の意志で選んで学んだ言語だから、その使用者に「なぜ、この言語でコミュニケーションをするのか」を要求する。即ち、便利さから使用される大国の言語とは立場が違い、対等なコミュニケーションのための道具なのである。

ゆえに、上述したように、エスペラントは、自分の意志で選んで学び、選んで使う言語であるから、母語や居住地の日常生活言語のように無意識のうちに身につけていたり、生きるための必然があって学んだりする言語とは根本的に違うのである。即ち、絶対的に習得が容易でなければならないのである。また、多くの言語で読み書きは独習できるが、会話は別に習わないと習得が難しいという理由の一つとして書き言葉と話し言葉に差があるということがある。文字と発音が不一致とか、アクセントや抑揚が規則的でないという問題もある。しかし、エスペラントではこのような問題は生じない。これも、エスペラントの国際語としての妥当性の高さを証明していると言えるが、いずれにしても、このことからエスペラントでは書き言葉と話し言葉は

原則的に同じでよいと言える。要するに、文体は原則的にいつも同じで構わないのである。

上記（Ⅱ）についても、多少、説明が必要である。上述したように、エスペラントは、確かに、比較的容易に習得できる言語だが、学習者の母語、既習言語、背景文化などによって習得の難易度に多少は差があると言える。一般の自然言語にくらべるとはるかに容易に習得できるのは事実だが、同時にエスペラントが創られた19世紀後半の「世界」を反映して、ヨーロッパの言語、文化を背景にしている人々に有利な点があることも事実である。しかし、この有利さをいくらかでも享受できるのは世界の人口から見れば、20-30%である。すなわち、大多数の人々には、平等に易しく、かつ平等に難しいのである。

もちろん、たとえ、20-30%であるにしても、言語習得の際に、有利な人々がいるのだから、それを根拠にして、エスペラントは、公平、中立な言語ではない、ゆえに、国際語としては相応しくないという議論も成り立つかもしれない。しかし、それは、公平、中立という概念を狭く捕らえ過ぎていると言える。ここでの公平、中立な言語という意味は、誰にとっても母語ではないという意味であり、その意味においては、エスペラントはその条件を満たしていると言える。

確かに、上述したように、エスペラントはそれができた時代の世界を反映してラテン語的要素を多く取り入れているから、ヨーロッパ言語の中にはエスペラントの単語と同語源のものがたくさんある。それゆえ、ヨーロッパ言語を母語とする学習者が、不注意に自分の言語での意味範囲でエスペラントの単語を使用した場合、エスペラントの辞書に書いてある意味では理解できないことがある。これは、エスペラントに言語的に問題があるのではなく、その使用者が未熟であったり、異文化間コミュニケーションを効果的に成立させるためにはどのような配慮が必要なのかについての認識、つまり、国際感覚が欠落しているからであると言えよう。

一方、個々の単語をゼロからおぼえるしかない日本語学習者としては、迷う事なくエスペラントの意味範囲で使用するから、その意味においては、逆に、有利性があるかもしれない。（もっとも、現実には、エスペラントを初

めて学ぶ日本人学習者の場合、既にある程度、英語を学習しているというのがほとんどであろうから、英語からの影響、即ち、英語からの 에스ペラントの語彙、文法の類推が働くのは当然であろう。その意味において、英語をどの程度、学習しているかが 에스ペラントの習得の速度に影響があることは否定できないと言える。

上記 (I), (III) は一見したところ、矛盾しているように思える。即ち、文法、発音、アクセントの規則がとても合理的で例外もないとすれば、微妙な感情や専門知識は表現できないのではないかという反論も考えられよう。しかし、結論的に言えば、それは反論にならないと言える。どの自然言語も独自の文化的背景を反映して、他の言語には翻訳不可能な要素をたくさんもっている。それは逆から見れば、他の言語、文化の中では必要でない要素だから、この点を取り上げて言語の表現能力を判断するのは間違いであるというのが 에스ペラントの基本的考え方と言える。長い歴史をもった自然言語の中には、文法上の性の区別、時制や相による形式の変化など個々の言語の独自性という点から見れば、意義深いのが、言語習得という点からは、困難さを不必要に高めていると言える、コミュニケーションを行う上で必ずしも必要でない、このような装飾品とも言える要素が、エスぺラントの中に存在しないとしてもそれは問題にならない。それは人工国際語 에스페ラントの本来の目的とは相いれないものだからである。

したがって、(III) については、ほとんど補足する必要がない。エスぺラントで多くの詩や、小説が書かれているし、自然言語で書かれた多くの文学作品その他が、多数、原文の味わいを、ほとんど損なうことなく、エスぺラントに翻訳されているのだから、自然言語と対等の表現力を有しているのは言うまでもない。

ところで、自然言語の中では、英語は、不規則動詞等は、確かにたくさんあるが、概して、規則性の高い言語であると言えよう。ザメンホフ自身も、ラテン語や、ギリシャ語等のきわめて難しい、不規則度の高い言語を学んだ後で、英語に出会い、「……文法形態が、たくさんあるということは、ただむやみやたらな歴史上の行きがかり上の出来事であるばかりではなく、言語そのものにとっては必要のないことがらなのだ。」と述べている。ゆえに、

ザメンホフ自身、英語の学習の容易さ、規則性の高さを十分に意識しながら、それらを更に進める形でエスペラントを作り上げて行ったと言えよう。

ここで、エスペラントのその規則性について具体的な例をあげて少し説明してみよう。なお、例文の右には英語の訳を付しておく。

- (1) Mi estas Suzuki. (I am Suzuki.)
- (2) Vi estas Suzuki. (You are Suzuki.)
- (3) Li estas Suzuki. (He is Suzuki.)

上の例から明らかなように、不規則に変化する英語の be 動詞にあたる estas は現在時制では無変化である。過去時制では, estis が, 未来時制では, estos が, 使用されるが, いずれも人称変化はしないのである。

以下、その規則性をいくつか表の形で示して行く。

(4) 名 詞

格 \ 数	単 数	複 数
主 格	-o floro 花 ; libro 本	-oj floroj ; libroj
対 格	-on floron ; libron	-ojn florojn ; librojn

(5) 形容詞

格 \ 数	単 数		複 数	
主 格	-a bela	(-o) floro	-aj belaj	(-oj) floroj
対 格	-an belan	(-on) floron	-ajn belajn	(-ojn) florojn

(6) 動 詞

法		語 尾	例		
基 本 形		-i	esti,	havi,	lerni
直 說 法	現 在	-as	estas,	havas,	lernas
	過 去	-is	estis,	havis,	lernis
	未 來	-os	estos,	havos,	lernos
条 件 法		-us	estus,	havus,	lernus
命 令 法		-u	estu,	havu,	lernu

(7) 人 称 代 名 詞

人 称 \ 数	单 数	複 数	再 帰 形	
			单 数	複 数
第 1 人 称	mi	ni	mi	ni
第 2 人 称	vi	vi	vi	vi
第 3 人 称	li ŝi ĝi	ili	ŝi	
一 般 人 称	oni			

(8) 相関語群

	ti- 指示	ki- 疑問 関係	i- 不定	ĉi- 普遍		neni- 否定	代 名
-o 物・事 (一括)	tio そのもの そのこと	kio なに, なにごと (文, 句, 事 tio…)	io あるもの あること	ĉio すべてのもの すべてのこと		nenio なに (ごと) も…ない	
-u 人・物 (個別)	tiu その人 それ	kiu だれ どれ (人・物 tiu…)	iu ある人 ある…	ĉiu めいめい おのおの 各…	ĉiuj みな すべての	neniu だれも… しない どの…も …しない	代 詞
	その	どの					
-a 形状 状態	tia そんな	kia どんな (形容詞 tia…)	ia ある (種の)	ĉia あらゆる (種類の)		nenia どんな…も …しない	代 形
-es 所有	ties その人の その	kies だれの その人 それ } の …が… する	ies ある人の	ĉies 万人の		nenies だれの…も …ない	容 詞
-e 場所	tie そこに	kie どこに (場所 tie…)	ie どこかに	ĉie いたる ところに		nenie どこにも… ない	代
-el 方法 状態	tiel そうして そのように ひじょうに	kiel どうして どの (tiel) 【接】… として …のよ うに	iel どうにか して	ĉiel いろいろに		neniel どうしても …ない	副 詞

-al	tial それゆえ 理由 だから	kial なぜ	(tial)	ial なぜか	ĉial *	nenial *	代 副 詞
-am	tiam そのとき すると	kiam いつ	(時刻 tiam..)	iam いつか	ĉiam いつも	neniam …するとき がない けっして… しない	
-om	tiom それほど そんなに	kiom どれ ほど	…する だけ (tiom…) …する かぎり	iom いくらか 少し	ĉiom ありたけ 全部	neniom すこしも… ない	

ここでの目的は、エスペラントの文法について、網羅的に示すのではなく、エスペラントの文法構造がいかに規則的であるかを、一目瞭然となるような形で示す事であった。したがって、例文の(1)~(3)、表の(4)~(8)は、その目的のために提示したのであり、これによりその目的は達成されたと思われる。(もちろん、詳細については、然るべき文法書を参考にすることが望ましい。)

本章では、エスペラントの言語学的概略を述べて来た。次の章では、上述したように、本章の発展的議論を対照言語学の立場から展開する。そこでは、語用論や認知言語学に立脚した詳細な考察が進められる。その考察を通じて、エスペラントの国際語としての言語学的妥当性が立証されて行くことになる。

(「国際語としてのエスペラントの可能性(2)」に続く)

注

- 1) 聖書は次のように述べている。人間はかつてひとつの共通の言葉をもっていた。そして、それゆえに自分たちが大きな力をもっていると思いこみ、天にもいたる巨大な塔を作ろうとした。これを見て神は言った。「ごらん、彼らはみんな同じ言語をもったひとつの民である。そしてその始めた最初の仕事がこの有り様だ。今に彼らの企てる何事も不可能なことはなくなるだろう。よし、我々は降りていって、あそこで彼らの言葉を混乱させ、彼らのことばが互いに通じないようにしよう。」(創世記第11章6～7) なお、この部分については、大沢(1972. 2)を引用した。
- 2) 国際語をつくる作業はエスペラントをもって終わったわけではない。エスペラント発表後にも、イド等の自然派と呼ばれる一連の人工国際語が作られている。これらの言語は、エスペラントよりも、自然語に近い形態を取っていたが、あまりにも自然語に似せようとして、例外や不合理さまで取り入れたために、難解さが高まり、いずれもほとんど普及しないうちに滅びてしまった。

参考文献

- Boulton, Marjorie (1980) *Zamenhof CREATOR OF ESPERANTO*, London: Routledge & Kegan Paul Limited.
〔水野義明訳(1993)『エスペラントの創始者 ザメンホフ』東京:新泉社〕
- 伊東三郎(1950)『エスペラントの父 ザメンホフ』東京:岩波書店。
- Krizantemo (1974)『エスペランティストのための会話独習法入門』大阪:日本エスペラント図書刊行会。
- Lins Ulrich (1975) *LA DANGERA LINGVO Esperanto en la urvano de persekutoj*, Kyoto: L'omnibuso.
〔栗栖継訳(1975)『危険な言語—迫害の中のエスペラント』東京:岩波

書店.]

三宅史平 (編) (1974) 『エスペラント小辞典』 東京：大学書林.

大沢孝明 (1972) 『世界語・国際語の歴史』 京都：ロンド・ハルモニーア出版会.

大島良夫・宮本正男 (1974) 『反体制エスペラント運動史』 東京：三省堂.

ロンド・ハルモニーア・アカデミーオ (1972) 『NOVA KURUSOLIBRO DE ESPERANTO』 京都：ロンド・ハルモニーア出版会.

Synopsis

The Possibility of Esperanto as the International Language

Yusuke ANDO

In this essay we will argue about the possibility and validity of Esperanto as the international language, rather than the world language, based on the idea that we should distinguish the international language, which aims to be used when the people whose native languages are different have to communicate with each other, maintaining their native language as they stand, from the world language, which aims to be used all over the world, abolishing native languages.

We will present the three basic conditions to satisfy for the desirable international language as follows:

- (1) The ease of learning of the language
- (2) The language's neutrality and impartiality
- (3) The language's own rich expressivity

It is true that English satisfies the above conditions fairly compared with other languages. However, it cannot be said that English

satisfies them perfectly in that it is not always an easy language to learn because of having some irregularity in verbs and pronunciation and so on, and despite the fact that English has a marvelously rich expressivity of communication and that it has spread extensively all over the world, English is a native language for those who were born and have grown up in countries like the United States and the United Kingdom.

In that sense, it cannot be said that English is a suitable language as the international language.

However, Esperanto is basically a regularity-oriented language which aims to become widespread as the artificial international language all over the world, and has a sufficient expressivity for communication between people. Therefore, we regard this language as the better one for the international language, because we can assume that Esperanto satisfies the above three basic conditions of being the international language. The historic facts support the idea that Esperanto is the only available and popularized language as the international one, in that there are some Esperantistas in each country all over the world, though a lot of plans were made and presented by a large number of people from prehistoric days.

In this essay, because of a lack of space, we are mainly concerned with the presentation of the linguistic outline of Esperanto, illustrating the regularity of the parts of speech including nouns, verbs, and pronouns. However, in our forthcoming essays, we are going to present some of the linguistic values of Esperanto as the international language from the point of view of contrastive linguistics. In doing so, the recent results of cognitive linguistics and semantics, pragmatics will play an important role in showing our assumption and principle.